

ハイスクール・フリー ト～空の覇者～

たはまらたはまさまたらた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第三次世界大戦、その最中に轟沈したずいかくは原因不明だが蒼き人魚達の世界に
蘇つた。空の覇者は何を齎すのか？

目次

日本海軍原子力正規空母すいかく轟沈	1
原子力正規空母すいかく 諸元	—
遭遇	—
横須賀へ向けて	—
帰還	—
乗員招集	—
用語	—
新兵の話と宗谷家の夜	—
特殊な教材	—
試験と演説	—
宴会	—

すいかく出港	—						
作戦名：遺憾の意	—						
異界の戦力	—						
銀翼	—						
ブルーマーメイドフェスタ	—						
硫黄島要塞	—						
異変	—						
動乱I	—						
103	95	89	84	80	73	68	62

日本海軍原子力正規空母ずいかく轟沈

日本海軍の大佐である谷風色葉は既に斜度30度に達している艦内で回想していた。第三次世界大戦が勃発する前兆が現れ海上自衛隊が日本海軍になるのはさして時間がかからなかつた。

そして海軍大国へと返り咲いた日本は次々と新型艦や航空機を送り出した。その中でも諸外国を驚かしたのは国産原子力空母だ。その中でも最新型の一つである「ずいかく」。これの艦長職を命じられた時は体が震えた。日本が世界に誇る機動艦隊の一員になれるのだ！誰が震えずにいられるだろうか。その後中国とロシア、北朝鮮によつて口クな抵抗もできないまま韓国が数日で占領され数時間後に米軍基地も陥落し朝鮮半島は占拠された。

翌日アメリカ等を含めたNATOと同盟国の日本が国連軍として宣戦布告。最初こそ優勢だった中国や北朝鮮は兵器の生産が追いつかなくなり連日沖縄や厚木から飛び立つ国連軍の爆撃機による空襲で主要都市と軍需工場が壊滅したため実質的に戦える国はロシア一国となつたがここからが手強かつた。ロシアは今までの2カ国とは根本から違つた。これにより国連軍は100隻以上の艦艇を失い原子力空母は5隻、通常動

力の空母は8隻が撃沈された。結果出撃したのが日本海軍の威信にかけて建造された最新鋭原子力正規空母しようかく型一番艦 しようかくと二番艦 ずいかくだつた。

ロシア海軍と空軍の奇襲攻撃によりしようかくが飛行甲板へ被弾し日本へ引き返した。ずいかくは直ちに飛行隊を発艦させロシアの艦隊と接敵、燃料残量の問題上帰還しなければならないロシア空軍機を尻目に艦隊を壊滅させた。

その後もずいかくの幸運は続く、ロシアの新鋭駆逐艦を発見し撃沈。続いてたまたま浮上していた潜水艦を艦砲射撃で撃沈。更に千島列島の基地で補給中だつたロシアの空母を攻撃、燃料補給の最中だつたこともあり誘爆し基地がまるごと壊滅。受けた勲章は数しれない。

だがそんな幸運艦も最後の時だ。しようかくの甲板破損から約一年ロシアへの大攻勢をかける計画が実行されることとなり国連軍の半数の戦力が集まつた。そしてずいかくはその中でも激戦となる予想のオホーツク海域に姉妹艦のしようかくと共に出向いた。

2隻とその護衛艦隊は奮闘し数多の敵艦と航空機を撃墜したが補給のためしようかくはまたも引き返すこととなり戦線を一隻で支えることになつたずいかくだが周りの護衛艦隊には目もくれず恨みを晴らすようにずいかくに向けて集中攻撃が行われた。

結果飛行甲板はズタボロになりC I W Sを含めた対空兵装は大半が使用不能。多次元レーダーは3面のうち2面が使用不能。127mm単装高角速射砲は右舷側は5門中3門使用不能、左舷側は全砲門使用不能。対艦誘導弾や対潜誘導弾は残弾がなく、ダメージコントロールの結果も芳しくない。艦橋付近などにも多数ミサイルが爆発したり着弾したりしてひどいことになつていた。窓ガラスは吹き飛びたまたまC I Cに居て助かつたが艦橋にも命中した。様子を見に行つたが人の1部分だつたものや肉片がこびりつきかなり酷かつた。

このままでは浮力が足りず沈没する。しかもこのまま沈むとシステムなどの秘密を盗まれる可能性もある。

放送で退艦命令を出し機密保持プログラムの執行者のみ残す。機密保持プログラムとはもし敵に鹵獲されるような事態や艦を調られる危険性がある際に艦の原子炉を暴走させ艦ごと吹き飛ばす事だ。これは執行者に死ねと言つていてのと同義なのだが執行員は全員愛国者で構成されている上に同意も取れていたため問題はない。

問題があるとすればそれは執行員が全員既婚者な事だ。艦長もプログラム執行の権利はある。

艦長は退艦して下さいと言う執行者や副長を説得し今に至る。艦橋から外を見ると退艦した乗員たちは護衛艦隊に救助され戦闘海域から離脱しているところだつた。

君が代を歌い海軍司令部のある方角に敬礼したら奇跡的に無事だつた艦長席の引き出しから鍵を取り出して C I C に急ぎプラスチックの保護ケースを叩き割り鍵を十秒ごとに 3 つ回していく。すべてが回し終わり軍服を正して艦長席に座りそつと目を閉じる。人生が走馬灯のように流れ終わった瞬間意識が途絶えた。

この日ずいかくは周りのロシア艦を巻き込んで盛大に核爆発した。原因は原子炉の暴走、事故による死者は日本海軍大佐谷風色葉艦長 1 名（男性）しかしどんなに探してもずいかくの残骸は鉄片一つ残っていなかつた。

原子力正規空母すいかく

諸元

船名

すいかく

所属

日本海軍

同型艦

しょうかく

全長 450 m

全幅 最大 110 m

艦種

正規空母

乗員

操艦要員 約 500 名

航空要員 約 2000 名

機関

三菱式加圧水型原子炉4基

機密指定

後期型蒸気タービン6基

スクリュープロペラ6軸

予備機関

米式ガスタービンエンジン2基

転舵、航行補助装備

試製高圧スラスター8基

空母にも関わらず素早い機動が可能。ただし出力を上げすぎると船体が損傷する可能性があるため留意

速力

32ノット+ α

論理上はもう少し出せるがこれ以上は船体で異音を確認したため注意

兵装

自衛装備

21式127mm高角速射砲10基

右舷左舷に5門づつ。パイロットからはぶつかりそうと不評だがずいかくは何回もこれに助けられた。榴弾と化学式徹甲弾、ロケット推進弾が使用可能。速射砲と言うだ

けあつて発射速度が早い。欠点として砲身が加熱しやすい。

23式近距離艦対空誘導弾10連装発射機4基

性能は良いが誘導弾が高価。速射砲との兼ね合いもあつて艦内収納式。他国からは
しそうかく型の迷装備として有名。

22式短距離艦対空誘導弾28連装発射機6基

世界でも傑作兵器として有名。高い連射性能と安いのに高い追尾能力を備えている。

ただし威力に不安が残る。

対艦誘導弾4連装発射筒2基

対潜魚雷誘導弾8連装発射機2基

20式25mmガトリング砲改9基

以前のすぐに発熱してしまう銃身を交換した物。すいかく防空最後の砲

ブツシユマスター35mm機関砲4基

アメリカから輸入した海賊対応用機関砲。

試製光学砲1基

いわゆるレーザー砲。試験的に搭載されている

25式誘導弾攪乱装置4基

いわゆるチャフ。特筆すべきものはない。

25式魚雷攪乱装置2基

デコイを発射する。通常の魚雷も発射できる3連装発射管
22式電波妨害装置
ミサイル、レーダー等を無力化できる。非常に出力が強く使用中は周囲に人を置くことは避けるよう推奨されている。

レーダー

23式多目的三次元レーダー（三面）

最高出力で使用する際は全員屋内へいる状態で使用するよう厳命されている。何でも一瞬でふかし芋が出来上がつたらしい。

航空関係

24式電磁航空機射出装置5基

いわゆる電磁カタパルト。

22式着艦制動装置

そのまま。

エレベーター6基

航空機、兵器運搬用

ジェット保護装置

いわゆるジェットブラストデフレクター

第4空母航空団

搭載航空機 110 機内予備 10 機

24式艦上戦闘機 大鷦

22式艦上攻撃機 神雷

25式艦上電子戦機 安城

22式早期警戒機 夜鷹

23式多用途ヘリコプター 海風

20式双発輸送機 海鳥

補足使われていない倉庫を航空機格納庫に改装可能（エレベーター装備済み）

遭遇

警戒任務中だった宗谷真冬率いる強制執行艦隊は名前もない小島の近くに大型の船が投錨しているのを発見した。不思議なことに船は航海灯どころか船自身の機能が停止しているらしく明かりは一切なく不気味だった。近くによつて調べるとなんでもなく大きい飛行船支援母船のようだが砲を積んでいるなど不思議な船であり船の番号も登録されておらず完璧に不審船と言つて差し支えなかつた。しかし夜に突入するのは危険と判断され上からの命令で朝になつてから突入することになつた。

その頃すいかく艦内

一人の少女が目を覚まそうとしていた。

「何だここは？ 戦争中とはいあんだけ人殺したんだし地獄かな。にしてさ静かすぎる氣もするけど」

目がだんだん暗闇に慣れてきて周囲が見えるようになる。操舵輪に計器類赤い非常灯に艦内無線、これは見覚えがある。有り得ないと思いつつも分かる、ここはずいかくの艦橋だ。ゆっくりと見回していると艦長席にお茶とお饅頭が置いてあつた。手を伸ばして食べようとして神話を思い出した。その食べ物を食べたらもう元の世界には

戻れない。その時だつた、謎にすごい空腹感を感じつい饅頭を食べてしまつたのだ。食べた直後だつた。体が地に足ついたと言うかなんと言うかもう後戻りできない感じはした。ゆつくりと海の方を見てみると船が何隻か航行していた。形から見るにインディペンデンス級だろうか。あれは最新型に切り替わつて今じや後進国の海軍くらいしか使つていないだろう。

こちらに砲を向けていることから警戒しているのだろうか？確かに先進国の機動艦隊旗艦が来れば警戒はするだろうがあのオホーツク海周辺はロシア以外に国はないしロシア船籍の軍艦ならとつくに撃つてくるします彼らはインディペンデンス級なんて持つていない。ということは国籍不明船だ、しかも武装船。総員配置をかけようとしてマイクの放送ボタンを押したが反応しない。よく見てみるとまず艦橋のどのモニターも着いていないし艦橋に人が一人もいないのはおかしい。エレベーターは止まつているため階段を使って居住スペースまで降り大声で呼びかけて見たが反応はなく非常灯や誘導灯すらもついていない、船全体の電源が落ちている。

艦長室に入つてロッカーの中に入つてある拳銃の内ニューナンブを取り出して腰のホルスターにセット。儀礼的とはいえ渡されている真剣のサーベルを腰に吊るす。艦長席に座つて持つてきた強力発光ライトをつける。鏡を見て私はフリーズした。女になつてゐる！それも女子高生位の。髪はカラスの濡れ羽黒ともいえばいいのかとても

きれいだ。胸は美乳とでもいえばいいのだろうか？よく白の軍服が似合っている。

そうじやない！そつと下を見てみたが息子が無くなっている。最悪だ。気を取り直して艦橋に戻ろうと思った時だった。フラツと来てそのまま椅子に倒れ込むように座り気絶してしまった。

その頃強制執行艦隊旗艦弁天

「よおし、行くぞ。突入だ！敵がどんな奴なのはわからぬ。敵かどうかも不明だが怪しい奴は撃つて良い！いいなあ！」

『オウ！』

突入班を載せたスキッパーの上でこう呴いた

「真白じやねえがあの船なんか嫌な予感がする。世界を変えちまう何かが」

この予感が当たるかどうかはまだわからない。

横須賀へ向けて

大型艦に乗り込んだ弁天の突入班は圧倒されていた。大和型より大きいと思われるその大きさや何より驚いたのは恐らくレーダーだろう。各国の最新鋭艦艇でさえあそこまで大きなレーダーは積んでいない。他にも突入時に見た機関砲や速射砲に身震いした。艦の機能が停止していなかつたら確実に弁天を含めたこの船は海の底だつただろう。船内を歩いている最中に隊員が気付いたように言つた。

「この船人の気配がしませんね」

「そうね、私達が通つてきた居住区画にも人は居なかつたし。でも艦橋にお茶がありましたし人がいるのは確かだと思いますけど」

「まるで幽霊船ですね」

「見て下さい。艦長室です！何かこの船の手掛りがあるかもしだせんよ」

「よしつ！突入！」

特殊部隊さながらに突入したところで一人の少女が倒れているのを見つけた。

「真冬艦長、この子どうします？」

「階級章を見る限り旧海軍の大佐だと思うが、まあ取り敢えず弁天に持ち帰ろう」

「わかりました」

弁天医務室

目を開く、白い天井と蛍光灯、更に薬品の匂い、おそらく医務室。まで現在ずいかくは艦の電源が落ちていたはずだ。電気がついているのはおかしい。急いで腰に手を伸ばすとニューナンブはなくサーベルもない。急いで飛び起きて辺りを見回す。カーテンでベッド周りは覆われていて周りの様子はわからない。取り敢えず武器になるものはと探すが無い。仕方ないのでベッドから降りて靴を履きハンガーにかけてあつた制服の上着を羽織る。

カーテンをバツと開けると全員固まつたように止まつたあと大騒ぎを始めた。

「どうも、強制執行艦隊司令の宗谷真冬だ。唐突に聞くがお前あそこで何してた？」

「…………」

「黙秘か、別に良い。ならあの船を沈めるだけだ」

この時私は少し焦った。あれが沈めば大量の放射線が撒き散らされるし自分が艦長をやつていた船を沈められるのは嫌だ。

「分からぬんです。あの船は沈んだはずでした。何十発何百発とも言える砲弾や魚雷、ミサイルを受けて最後は盛大に自爆して、そして私自身も死んだはずなんです。なのに何故生きているのか、なぜ艦が無事なのか、本当に分からぬんです」

「うーん、そう言えば突入班も含め全員調査不十分なんだよな。艦内の案内頼む。お前が本当にあの艦の乗員ならわかるだろう」

「わかりました、ただしモノによつてはお見せできないものもありますがいいですか?」「めっちゃ気になるけど良い、後これ回収してたけど銃とサーベルな」

再びずいかく艦内

「取り敢えず電源室に行きましょう。あそこで発電機始動させて電源供給しないとずっと真っ暗ですから」

取り敢えず電源室に行つて供給元をバッテリーに切り替える。10秒後くらいにこの電気もついた。

「取り敢えず電気はこれで大丈夫です。最低限の自衛火器とシステム等しか使えないですが不便はないですから。バッテリーも5日間位は持ちます」

「へえーすげえな。おつと素が出ちまつた。今の無し」

本当にこんな人が艦隊司令なのか不思議になる。続いてC.I.C

「今からシステムを起動しますね。少し待つててください」

メインコンソールを艦長用のIDとパスワードを使用しシステムを起動すると第2機動艦隊のエンブレムが出て来て武装やレーダー、警報機などの自己診断が開始され完了の文字が現れた。

差し込んだ鍵を回してもう一度起動用パワードを入力すると周りのコンソールも次々と点灯していった。このずいかくが一時的とはいえ息を吹き返したのだ。思わず泣いてしまった。

「どうしたんだ？ いきなり泣き出して？」

「少し懐かしくて、お見苦しいとこお見せしました」

その後も航空機格納庫で戦闘機や攻撃機の説明をして驚かれたり乗りたいと暴れだしたり一日大変だった。

話によると明日横須賀に帰還らしい。

まさか戻れるとは思っていなかつた。そして海の底に沈んでいるとも。

帰還

長い汽笛と入港ラッパが鳴らされ周りの艦が次々と入港準備に入る。時間は深夜の2時。こんな未知の大型艦を人目に晒すわけに行かないという判断なのだろう。今現在自分がやることはない。船の原子炉は起動に時間がかかるし人も足りない。補助機関だつて燃料が心許ないため使えない。そんな訳で牽引されながら来たわけだが話には聞いていたが本当に海に沈んでいるとは思つていなかつた。胸ポケットに入れた箱を振つて飛び出てきた一本を口に咥えて火をつける。

吸い終わつてしばらくしてからもう一度見るともうすぐ下船というところまで来ていた。急いで幹部常装第一種夏服の上着を着て整える。

しばらく待つているとタラップが掛けられ遂に横須賀の土を踏んだ。
目の前に何かの制服を来た女性がいた。

こちらを見ると

「こんにちは、ブルーマーメイド安全監督室情報調査室長兼一等保安監督官の宗谷真霜です」

長い汽笛と入港ラッパが鳴らされ周りの艦が次々と入港準備に入る。時間は深夜の2時。こんな未知の大型艦を人目に晒すわけに行かないという判断なのだろう。今現在自分がやることはない。船の原子炉は起動に時間がかかるし人も足りない。補助機関だつて燃料が心許ないため使えない。そんな訳で牽引されながら来たわけだが話には聞いていたが本当に海に沈んでいるとは思つていなかつた。胸ポケットに入れた箱を振つて飛び出てきた一本を口に咥えて火をつける。

吸い終わつてしばらくしてからもう一度見るともうすぐ下船というところまで来ていた。急いで幹部常装第一種夏服の上着を着て整える。

しばらく待つているとタラップが掛けられ遂に横須賀の土を踏んだ。
目の前に何かの制服を来た女性がいた。

こちらを見ると

「こんにちは、ブルーマーメイド安全監督室情報調査室長兼一等保安監督官の宗谷真霜です」

であることが予想される。

「ずいから艦長日本海軍谷風色葉大佐であります。宗谷真霜ブルーマーメイド安全監督室情報調査室長兼一等保安監督官」

「そんなに固くしなくて大丈夫よ。真霜さんとかでいいのよ？ 谷風色葉ちゃん」

「しかし宗谷真霜殿は階級上恐らく上官です。そのように気安く呼ぶのは「いいから、いいから、ただ少し話を聞きたいから着いてきて」了解」

不安だらけではあるがついていく以外の選択肢はなさそうだ。周りにいる宗谷真霜の部下と思われる者達の肩が片方少し下がっている。銃の入っている証拠だ。

言われたとおりワゴン車に乗りしばらく無言で走つていると唐突に宗谷真霜が話し始めた。

「宗谷真霜個人としての質問なんだけど貴方、人を殺したことある？」

「いきなりなんだとも思うが答える。

「あります、大量に殺しました。ただし法律で許された殺しです。まあ大抵の人は戦争と呼びますが」

「そう、貴方これからどうするの？」

「どうするかは決めていません。どうにかしないといけないのは分かつてているんですけど。まあそこら辺で仕事を探します。幸い国から補給品が切れたとき用のドルは渡さ

れでますし。それになんと言うかここは私の知っている日本では無さそうです。ですから一旦それで生活費を支えて急いで仕事を探しますよ」

「無理よ、もうこの国に仕事なんて殆ど無い。あなたも見たと思うけど日本の平野部はほぼ水没して今じやこの国はメガフロートの建造と沖合の地盤沈下が悪化しない場所でのメタンハイドレート採掘で凌いでいるようなものよ。それもあと数十年できつと凌げなくなる。この国の食料自給率は世界でも最低クラス。それに学生の死亡率も高いの。何故か分かる?」

「まさか学徒出陣とか言わないですよね」

「残念ながら当たりよ。この国は海軍を解体した。いや解体させられた。陸軍は頑張つて守つたから朝鮮や満州の権利はぎりぎり守れた。でも海軍は無くなつた、だけどその後すぐロシア帝国とアメリカ合衆国との睨み合いが始まつた。いわゆる表向きは自由主義のアメリカと帝国主義の衝突だつた。日本はロシアに対しての防波堤にさせられた。それで出来たのが今の大和型などを持つたブルーマーメイド。それを育成するために出たのが女子海洋学校。更に幹部を育成するのが海洋大학교。でも海洋大학교にいける子はまだいい。海洋学校出た途端、つまり18歳で実戦配備なんてザラにあるし海洋学校生徒の時でも国家公務員扱いだからいつでも動員される。海上安全保持法第一条に書いてあるの、海洋学校、大学校生徒は我が国の国家公務員で有り有事の際無

制限に艦艇、人員を政府が動員する権利を持つつてね。つまり彼女達はブルーマーメイド、蒼き人魚になつた時点で人には戻れない。海で泡になつて消えるしかない」「なるほど、酷いものです。私の場合は海軍兵学校主席卒業したあと巡洋艦で経験を積んであの船の艦長になりました。ただ一応私のもといた世界でも16歳からの兵士動員は本人の同意があればやつてよかつたですし。ただろくに訓練もさせずに戦場に送り込むのは酷ですね」

「私が初めて人を殺したのは17歳のときだつた。海賊のかは分からなかつたけどいきなり乗り込まれてあつちは自動小銃で武装して更に撃つてきた。犠牲者は拳銃を撃つのを躊躇つた者全員。32人乗つてたけど生き残つたのは11人だつた」

「ちなみに学校生徒の死亡率はどのくらい何ですか?」

「10～30%ぐらいかしら。中には自殺もいるし正確に殺された数とと言うわけでもないけど」

「ひどいですね。そんな実態を知つてもブルーマーメイドになろうとする人いるんですか?」

「居るわよ。確かに危険だけど給料は高いし大型艦に乗れれば死のリスクも少ない。でも一回入隊すればもう後戻りできない。死へ向けて一直線よ」「それでこの車どこに向かつてるんですか?」

「海上安全委員会本部よ。海上安全整備局は腐つてゐるけど委員会の方はまだまし。自分の私益ではなくて国益のためを考えて動くから。」

そう言つて彼女は水を飲んだ。

「でも彼らはたとえ学生であろうと国益の為に切り捨てる。そういうのをわかつた上で聞きたいの。貴方、ブルーマーメイドに入る気ない？」

「何故です。確かに仕事をくれるのを嬉しいんですけど」

「言い方を変えましよう。今の海上安全委員会は即時に実力行使のできる部隊を創設する気でいる。でもその為には殺しを躊躇わずできる人間がいる。仲間を殺されても大丈夫な、そして死んでも問題ない者が。それに関して白羽の矢が立つたのがあなたなのよ」

「なつた際のこちらの利益は？」

「1身分を保証及び貴方を特別海上警備官に任命し即応機動艦隊司令とする。またクルーの訓練日程も決めるなどを許可する2ずいかくを旗艦とし艦隊に對して厚い支援を約束する。3常時攻撃を許可しある程度の独断行動を支持する。4全ての港湾等に對しての寄港許可5高い給料」

「最後だけものすごく現実的ですね」

「まあどんな組織でもこんなもんよ。で、どうする？入る、入らない？」

「答えは……入ります。私は戦場に長く居すぎました。もうそれしか出来ません」「じゃあ、忙しくなるわよ。今から貴方の上司になる人にご挨拶ね」

その後約一時間。若い人から年寄りまで海上安全委員会の人間に質問され続けたのだった。

再び車の中

「疲れました……。そう言えば私の家つてどうなるんですか？官舎とかですか？」

「取り敢えずは私の家かな。官舎は飽きないらしいし。あなた勉強できるんでしょ？」

「まあそれなりに」

「なら妹に勉強教えてくれない。今度受験なんだけど」

「海洋学校ですか？」

「よく分かつたわね！ そうよ海洋学校よ」

「ブルーマーメイドというのは宗谷家で運営されているんですか？」

「そういう訳じやないんだけど、まあ実質それに近いかな」

「権力の一点集中は危ない気もしますけどね」

「それ以上にやばいのが海上安全整備局の上層部よ。貴方のこと殺してまで船を手に入れようとしたんですから」

「それを阻止したのが海上安全委員会と」

「その通りよ。そうは言つても貴方を味方にしたほうが國益が大きいと判断しただけだと思いますけど。さあもうすぐ着くわよ。宗谷家に。」
ゆっくりと日本の空に朝日が登つてきていた。

乗員招集

その日宗谷家に着くと私のことを保護してくれた真冬さんに恐らく母と思われる人。それから中学生位の女子がいた。

「貴女が谷風色葉ちゃん? 私は宗谷真雪、真霜、真冬、ましろの母よ。官舎に移るまでつてことらしいけど宜しくね」

「いえ、こちらこそよろしくお願ひします」

「お母さん、この人誰?」

「貴方の憧れているブルーマーメイドよ。ねつ、谷風特別海上警備官」

「お母さん、何で機密情報もう知つてるのよ」

「なぜかしら? さあ、朝ごはんですよ」

本当にブルーマーメイドが大丈夫か不安になつた色葉であつた。

ずいかくは少人数でも運用できるように改造されることになつた。表向きは飛行船支援母船として。因みにずいかくの最終兵器でもある核弾頭に関しては伝えていない。あんなもの使わないのが一番なのだから。対潜誘導弾や対艦誘導弾等は技術開示した。とは言つても使うのは私が所属する事になる即応機動艦隊だけだが。その即応機動艦

隊もいつの間にか日本海上保安隊と言う名前に変わつていた。因みに私の階級は結局海上保安監となつた。階級で言つたら中将相当だ。二階級上がつたのである。期待するのはいいがかなりの重責、ずいかくを任せられた時の嬉しさと責任のごちやませになつた感覚が蘇つてきた。

今は東京女子刑務所に来ている。そう、海上安全委員会の言つていた条件に当てはまるのは孤児か犯罪者、特に殺人で死刑判決を受けた者くらいしか居ないので。選定基準は健康で殺人歴があり死刑判決の女子、または孤児。更に15歳とかいうよくわからぬ基準。因みに女子なのに関してはブルーマームエイドは女性しかなれないでの仕方がない。15歳というのは受験で表向きは海洋学校生徒として扱いたいという狙いがあるのだろう。

とはいえずいかくの改装に関しては1年ほどかかるしその間に叩き込むつもりでもあるが。ここに乗組員を見に来たが上からは反抗が酷い場合は殺しても構わないと言われている。ある意味彼女たちは死刑執行が延期になつただけと言つても過言ではないだろう。手元にあるリストを見る。全員改心していく志願者らしいが経歴はひどいものだ。

~~~~~

海老原 美保 1

親と死別し浮浪児になる。なんの気まぐれか殺した相手が子供で殺し方が酷く死刑判決。刃物の扱いになれている模様。

二神 理紗 2

猶奇殺人犯。小学校の頃から親も含めて約5人手足を切り取る等して殺していたことが判明。現行犯逮捕。一家で死刑判決。親の死刑は未執行。薬物、刃物の扱いになっている。親が医者だつたこともあり一定の医術の技術有り

棚原 咲 3

いじめに對して反抗。椅子で殴りつける等の暴行を行いそれが原因で相手側が死亡、逮捕後裁判で惨敗。死刑判決

堂園 沙耶香 4

元海賊という名の武装集団。日本人民解放戦線の少女兵士。ブルーマーメイドを6人射殺。死刑判決。戦闘スキルは高い。

錦織 かすみ 5

日本人民解放戦線の少女兵士。民間人大量虐殺で死刑判決。殺人に關して負い目を感じない。

奥寺 麻央 6

日本人民解放戦線のスカウト担当。直接的に殺していないため無期懲役。

下澤 真樹子 7

別の武装集団。シーシェパードの少女兵士。主に捕鯨船。特に日本の船を執拗に狙い護衛中だつた改フリーダム級沿岸海域戦闘艦をシージヤツク。その主砲で捕鯨船を撃沈。応援に駆けつけた改インディペンデンス級の噴進魚雷によつて撃沈され脱出した所を即逮捕。死刑判決。船の操縦が上手く銃器の扱いにもなれている。

下菌 五月 8

シーシェパードの少女兵士。階級が高かつたようで全体を見る力に長けている。銃器の扱いに慣れている。

釜田 千華 9

シーシェパードの少女兵士。爆発物に関して専門家レベル。また砲撃の腕も高い模様。レーダーを壊しても手動操作で攻撃、命中させた。死刑判決。

米盛 優紀 10

ジャパンミリタリーサービスの少女兵士。派遣先で民間人を誤射。被害国からの要請で死刑になる予定だつたがその国がクーデターで崩壊。日本の最高裁で無期懲役。正規軍人並みの能力はある。

住岡 英里奈 11

ジャパンミリタリーサービスの少女兵士。小隊長だつたが誤った命令を出し村を砲

撃。後送され死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

田阪 訓子 1 2

ジャパンミリタリーサービスの情報分析官。政府のデータをハッキングしたことがバレ特別高等警察に捕まつた。

大藤 麻莉子 1 3

日本の指定極左翼集団、日本共産党に騙されて兵士として使われていた。特高の一斉摘発の際に逮捕。死刑判決。

惣田 真有美 1 4

元特別高等警察の捜査官。ヘマやらかして追放され死刑判決。

河東 亜佐美 1 5

元特別高等警察の捜査官。惣田 真有美と共に追放、死刑判決。

牟禮 沙世 1 6

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

東原 紗耶加 1 7

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

相宮 宜子 1 8

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

満武 れな 19

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

濱原 真里江 20

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

屋木 幸絵 21

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

鍋 亜妃 22

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

紫牟田 知美 23

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

鎧 里香 24

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

小松澤 夏芽 25

陸軍中野学校にて落第。情報隠匿の為に死刑判決。正規軍人並みの能力はある。

米坂 和嘉子 26

元関東軍防疫給水部本部所属の天才少女。子供を逃がそうとした所を憲兵によつて逮捕。厳しい取り調べによつて精神が壊れ言われたことを淡々とこなすロボット化

している。

加用 尚恵 27

元海上安全整備局局長の娘。親が逮捕され社会的に抹殺され殺されそうだつたところを救助。海上安全委員会を盲信している。珍しく犯罪歴なし。

仁禮 千勢 28

元関東軍第24陸軍病院所属の軍医見習士官。医官が足りないため見習士官だが前線に送られた。工作員に罪をなすりつけられ死刑判決。冤罪であることが分かつたが軍に戻すわけに行かずここに配属。高い医療技術と戦闘能力を持つ。

地村 小波 29

元関東軍第24陸軍病院所属の軍医見習士官。医官が足りないため見習士官だが前線に送られた。実質的な上官でもあつた仁禮 千勢軍医見習士官の無実を訴えたが反乱とされ營倉入り。銃殺刑になるところを助けられた。医療技術と非常に高い戦闘技術を持つ。

これより下。孤児

馬橋 貴子 30

手先が器用で機械いじりが得意。

荒船 倉菜 31

料理が上手い。ただし精神的に弱い部分がある可能性が高い。

國末 舞姫 3 2

強姦被害者。男性に対してもうマを持つている。耳が良く音の聞き分けも得意。以下特筆すべきこと無し。

新鞍 誉子 3 3

今熊 紗綺 3 4

大角 圭恵 3 5

譜久里 茉希子 3 6

沢松 泉帆 3 7

蕗田 鮎佳 3 8

見方 神楽 3 9

田鶴 光瑠 4 0

加戸 梨英 4 1

寄貞 紗織里 4 2

湯野 凪沙 4 3

久木元 真友 4 4

堀地 裕絵 4 5

計45名

（～～～～～～～～～～～～～～～～）  
読んでいるとだんだん人が集まってきた。全員続々とバスに乗り込んでいる。腐つてもこれからは彼らがずいかくのクルーだ。  
しつかり拳銃弾が入っていることを確認してバスの後ろのレクサスに乗り込む。母校の横須賀へ向けて車は走りさつていった。

# 用語

## 谷風色葉

元男。翡翠色の目に黒髪のセミロング。軍服の似合う少女。元々ずいかくの艦長だつたが死んで生き返つたら少女になつていた。

## 階級

海軍大佐→特別海上警備官→海上保安監

## 用語

## 海上安全整備局

一言で言えば腐っている。私利私欲の為に資金を横領し現場の声など聞かない。文民統制の悪い面が大きく出た組織。ブルーマーメイドに対しての指揮権を持つている。また海上安全委員会からの助言を尊重しなければならない。

## 海上安全委員会

各省庁や陸軍のトップ、かつての海軍上層部などで構成されている実質的な日本の海軍司令部。海上安全整備局に対して助言を行える。

## 海上安全保安庁の設置を目指している。

## 日本海上保安隊

海上安全委員会が直接指揮権を持つ日本唯一の実力行使部隊。作られたばかりの若い組織だが戦力に関してはブルーマーメイドを凌駕する。

## 海上保安隊行進曲

1

守るも攻むるも黒鐵の  
浮かべる城ぞ頼みなる  
浮かべるその城日の本の  
日本の四方を守るべし  
眞鐵のその艦日の本に  
仇なす國より守るべし

2

石炭の煙は大洋の  
龍かとばかり靡くなり  
弾撃つ響きは雷の  
聲かとばかり響むなり  
萬里の波濤を乗り越えて

旭日の光輝かせ

3

仰ぐ誉れの軍艦旗  
舳に菊を戴いて

太平洋をわが海と  
風も輝くこの朝だ  
守れ皇国の生命線

4

颯爽と 旭日をあびて

勢い起つわれらは 日本の盾ぞ

炎の息吹 鉄の意志

盛りあげて いざや進まん

力 力 力は若き

栄えある海上保安隊 皇国の護り

5

あらし雲 卷きたつ峯も

何かある断じて 我等は越えん

国防の使命 双肩に

受け継いだ 歩調はひびく

務 務 務は尊き

栄えある海上保安隊 皇国の護り

6

清新の 理想と仰ぐ

この日章旗に誓いて われらは往かん

栄ある命 若き眉

あたらしき 日本を擔う

誉 誉 誉と勇む

栄えある海上保安隊 皇国の護り

ブルーマーメイド

女性のみで構成された海の治安等を守る組織。

前身は女子海援隊→女子海上警備隊→海軍廃止→艦艇の譲渡→ブルーマーメイド

日本で最も殉職率の高い職場。なんと陸軍より多い。

標語は「海に生き、海を守りて、海に逝く」

砲撃が十分に出来ないほど法律が厳しい。海上安全保持法の改正が急務と言われて

いて同盟国のドイツなどからは早く改正しろ迫られている。

### ブルーマーメイドマーチ

#### 1番

千島の端から台湾の海岸まで我らは日本のために海で戦う

海の安全と自由を守り戦う者としてそして人魚の高潔な名誉を守るため我らが誇りとするその名はブルーマーメイド

#### 2番

我らの旗は夜明けから夕日まで全ての風に翻る我らは銃を手に取つてあらゆる気候と海で守つてきた。遠くの氷の張つた北海でそして日の照る南国の海で常に働く姿を見るだろう。それはブルーマーメイド

#### 3番

我らが誇りをもつて務めるブルーマーメイドと君の健康を祈願して乾杯！我らが生涯にわたつて戦つた多くの戦いにおいて我らは勇気を決して失わなかつた。もし船乗り達が天国を見上げたならば知るだろう。天国への道を護るのはブルーマーメイド

#### ホワイトドルフィン

男性のみで構成された海の治安維持組織。秘匿性の高い潜水艦等を運用している。ブルーマーメイドに比べ攻撃を積極的にできる。ただし艦艇の数が少ないこともあります

影響力は少ない。

### ホワイトドルフィンマーチ

1 さあ行こう水平線の彼方へ、太陽へ向かつて真つ直ぐ進め敵が転進してきたぞ、我々の旭日の一撃を見舞う時ださあ、敵を砲撃してやれ！魚雷を発射して撃沈し、爆沈の轟音を轟かせろ！我らは名誉に生きるか爆炎とともに轟沈かのみホワイトドルフィンを阻むものなし！

2 旭日を集めて創つた我々の大和魂を、青空高く送り届けよう神を圧倒する破壊力を備えた一握りの者たち、その生きざまは天皇のみぞ知る海を征することを夢見る人々の魂は、大波に負けない為の翼を我らに与えた航洋艦は出撃し、戦艦は揃つたホワイトドルフィンを阻めるものなし！

3 さあ乾杯だ、海を愛する兄弟たちを祝つて海を翔ける我らが兄弟たちへ伝えよう全てを捧げて海に散つた勇者たちに乾杯し、黄金に輝く旭日の光を心に刻むため、声高らかに歌おう我らが誇る男たち、ホワイトドルフィンに乾杯！

4 さあ行こう水平線の彼方へ、艦隊を並列に維持せよ白髪の老人として無事に生き永らえたい者は、艦首を水平線から外せ！海かける国境の守護者よ、我々も仲間とともに続こう輪形陣を組んで我らは行くホワイトドルフィンを阻むものなし

### 大日本帝国陸軍

なんとかのこつた陸軍。今も世界中で災害支援をしたりユーラシア大陸で睨みを効かせたりしている。

## 新兵の話と宗谷家の夜

車がこの保安隊の為に用意された敷地に入つていく。元々陸軍の訓練所だつたらし  
いが使わなくなつたのを整備したそうだ。

ここで日本海上保安隊の保安官となる者全員の顔を見られるのだ。さて今は雑に集  
まつただけだが、上が言うには義務教育以外にもある程度そちらの教育も施しその中か  
ら選抜したそうだ。バスの中で着替えたのか制服を着ていてる。

建物は煉瓦造りのなかなかしつかりした建物。校庭の壇上にたち鋭く笛を吹いて整  
列と叫んだ。どうやら上の話しさはホントだつたらしい。ある程度バラツキはあるが素  
早く綺麗な整列をした。続いて右向け右の後行進。なかなか綺麗な行進だつた。  
次に階級ごとに並ばせる。

保査長以下はセーラー服に水兵帽。日本海上保安隊の金文字が入つたペンネットを  
つけている。

3等保安士補以上は白の詰め襟の制服。帽子も水兵帽ではない。

最後に敬礼をさせて1800にホールに来ることを伝え解散にした。あちらで部屋  
割などは決めいた模様ですぐに既に上官が指示を出す構図が出来上がつていた。恐ら

く私がやることはメンタル強化等の訓練だろう。

1800

「これより火器使用講習を行います。明日テストを行うので合格して下さい。でなければ弾の一発も撃てずに死にます。質問は?」

「谷風保安監、我々は既に乙種火器使用免許を持つています。それなのにな」

パンツ！銃声が響き遅れて薬莢が床に落ち静まつたホールにカラソツと音が響く。わざと外して撃つた為頬を掠めたくらいだろう。

「氏名、所属、階級を答え」

「下菌 五月、日本海上保安隊所属、3等保安士です」

「では下菌3等保安士。私の言葉をもう一度思い出してみろ。質問は?とは聞いたが口答えを許したつもりはないぞ。それにいつ私が乙種火器使用免許の講習といった?それに私が君たちに求めているのは甲種火器使用免許だ。乙種では長距離攻撃手段は扱えない。分かったか!後で原稿用紙5枚分の反省文と腕立て50回!サボつたら射殺。いいな。返事は!」

下菌は半泣き状態で返事した。

「わがりまじだー、もうじまぜんからー、じゅうじまつでぐださい」「さてでは続ける。まず甲種火器使用免許とは…………」

しばらく後

「では私は校舎の教官室にいる。わからない所がある者は来るよう。下菌3等保安士は出頭すること。以上、解散」

因みにあの後下菌 五月は誰よりも眞面目に聞いていた。罰を軽くするわけではないが昇進の機会があつたら推薦することに決めた。

教官室でタバコを吸つていると失礼しますと言う声と共に下菌3等保安士と地村1等保安正だつた。

「どうした地村1等保安正。質問か？」

「いえ、一応私は下菌3等保安士の所属班の班長です。しつかりと責任取ります。一緒に罰を受けます」

「宜しい、ではとつと終わらせよう。それから私もやる」

「ほら、頬だけつけろ！休むな、更に疲れるぞ。ほら地村はもう終わりそうだぞ！」

「後3 2 1。終わりだ、よく頑張つたな」

「ありがとうございます、ほら下菌ちゃんも挨拶して」

「しなくても良い、疲れてるだろ。アイスでも食べるか？」

「良いんですか？」

「構わん、ただ余り言いふらすなよ。私の食べる分が無くなる。ほれつ」

二人共上手くキヤツチする。

「ハーゲンダッツじゃないですか。陸軍入つてた時は上海とか重慶行かないと買えなくてある意味高級品でしたよ」

「班長つて陸軍入つてたんですか?」

「軍人と言うより医官だつたけどね。でもゲリラ化人民解放軍や国民軍は病院も襲つてくるから結構戦つた方だと思うよ」

「凄いです。私は元々武装集団のまあ小隊長的な事やつてたんですけど最後の方なんて兵糧攻め状態で餓えて苦しんでる子達をせめて楽に殺してあげるくらいしか出来なくて。その癖上から早くアガリ持つてこいだの、酷かつた」と言つてまた涙目になり始めた。

「二人共中々大変な経歴だよな。まあこれからはそんなことは無いから安心しろ。君達の乗るずいかくは最新鋭艦艇、そう簡単には沈まないよ」

「そう言えば教官は何処から?」

「これまた難しい質問だな。敢えて言うなら海上安全委員会かな。実践経験はあるから安心しろ。さてそろそろ消灯だらうから戻るように。明日は休みだし好きに過ごすといい、後明日は私がいないと伝えてくれ。それから全員に明日給料支給されるはずだから受けとつてね」

「了解しました。アイスありがとうございます」

「はい、おやすみなさい」

二人が出てつた後ため息をつく。やはり表情を作るのは疲れるものだ。

煙草を灰皿に押し付けて火を消しゴミ箱に入れ軍服の上着を羽織る。外に行くと既にレクサスが止まっていた。乗り込むと滑るように走り出す。ここから宗谷家までは30分くらい掛かるためパソコンを開いて書類仕事を片付けていく。

弾薬や銃の申請にとある特殊な教材の手配等結構たくさんあるのだ。

また滑るように止まつて宗谷家に到着し車から降りる。家の門をくぐり扉を開けて入ると真霜さんがやつてきて夕食ができる旨を伝えてくれた。

「今日は和食にしてみたんだけどお口に合うかしら？」

「そんな、ありがとうございます。食事まで用意して頂いて」

「気にしないで、この超豪華和食フルコースみたいになつてるのはお母さんが張り切りすぎたせいだし」

「そうだぜ色葉、もうこの家に住んでるんだ気にはすんなよ」

「あの、色葉さん？ いや色葉お姉さん？ まあいいや。後でわからない所があるので聞いていいですか？」

「こういう時つてどう答えればいいんですか？ 全然勉強教えるのは構わないんですけど

「答え方が」

「良いよとかでいいんじゃないから?歳も近いんだし」

「まつ、いいですよ。でも何処で勉強するんです?人の部屋に入るわけにも行きませんし」

「色葉く、お前の部屋でいいんじやね?」

と、真冬さん

「うちのましろが懐くことなんてあんまり無いし色葉ちゃんの部屋で良いんじやない」と真雪さん

「それは私も思うわねえー」

と、真霜さん極めつけはましろ本人が希望。

味方は、いなかつた。もう一度言おう、いなかつた。

「じゃあそれでいいです」

因みに夕食はとても美味しかった。

色葉の部屋

「凄い殺風景ですね。色葉さんの部屋つて」

「まあ借りてるだけってのもあるけどそんなに私物ないしね」

確かに殺風景と言えば殺風景だろう。机と椅子、ベッドにパソコンが一台、本棚に本

と近くにある鍵のかかる棚にはサーベルと拳銃が入れてある。あとあるのは電気式の湯沸かし器くらいか、確かに殺風景だ。

「それで聞きたいところつて？」

「ここなんですけど」

「ああ、二次関数か。めんどくさいよね。この場合は」

「所で時間大丈夫なの？もう2400だけど」

「えっ、もうそんな時間なんですか？」

「言おうかなと思つたけど集中してたみたいだから」

「すみません、こんな遅くまで」

「私は大丈夫だよ。紅茶飲む？」

「頂きます」

私はかなり紅茶に凝つている。この世界に来る前のとき撃沈されたイギリス海軍の船を助けたときその船の艦長が紅茶を入れてくれたのだがとても美味しくて入れ方を習つたのだ。今回の茶葉はダージリンのファーストフラッシュ、所謂一番摘みだ。新鮮

で若々しい香味がある。結構高い。

ポットやカップをお湯で温めてポットに茶葉を入れる、続いてお湯を入れしばらく蒸らすと出来上がり。カップに最後の一滴まで注ぐ。

マカロンを取り出して皿に載せて出す。

「どうぞ、召し上がれ」

「ありがとうございます色葉お姉さん。本当に美味しい」

「それは結構。でも飲みすぎないようにね。寝る前だし疲れなくなるよ」

「うん、ごちそうさま。でも私初めて色葉さんの笑顔が見れた気がする」

「えっ?!」

「色葉さんいつつも口とか表情とかは穏やかでも目だけ笑つてないし」

「不覚だったなあ。まあそう言わないでよ」

「すみません、変なこと言つて。勉強見ててくれてありがとうございます。紅茶、ごちそうさまでした」

「また、わからない所があつたら聞きに来ていいよ。おやすみ、ましろちゃん」  
こうして宗谷家の夜は過ぎていった。

# 特殊な教材

今日はこちらで買ったバイクに乗つてとあるとこに向かっている。いまどき珍しい陸上、しかも山の中にある施設。大日本帝国陸軍総軍防疫給水部本部だ。駐車場にバイクを止めて警備兵に身分証明書を出すとすぐに中に入れてくれた。

「どうも、本部長の大石です」

「海上安全委員会から来た谷風です」

「本日はどんなご用件で?」

「わかっているでしよう? 昨日ご連絡したあれです」

「本当に次回海賊が捕まつたら引き渡してくれるですね」

「私は嘘は基本的につきません。捕獲でき次第納入します」

「そこまで言うならお渡ししましよう。届け先は海上保安隊本部でいいですか?」

「よろしくお願ひします」

話が終わりまたバイクに乗つて今度は山を下る。横須賀の辺りを走つている時だつた。適当に昼食でも取ろうとバイクを降りて歩いていたのだが何人かが集まつて人だかりが出来ていた。見てみると何名かの男が二人の少女に迫つてている所だつた。一人

の男がナイフを持つて いるため迂闊には近づけないのが現状だろうか。

電話を出して連絡しようとした時、パンッと軽い銃声が響いた。急いでみてみると守られていた少女が一人の男に向かつて発砲したようだつた。使つて いるのはブルーマーメイド正式採用銃ワルサーPPK、ドイツで警察用に作られた物だ。走つてそちらに向かう。まずサーベルで社会不適合者を峰打ちして気絶させ次に銃を握つたまま震えているツインテールの少女の手からPPKを取る。取り敢えず社会不適合者の皆さんは手錠をかけてそこら辺に転がし少女から話を聞くことにした。海上保安隊である以上警察権もあるのだ。

「取り敢えず何があつたか教えてもらえる?」

「貴方は?」

もう一人の少女から警戒の目で見られる。仕方ないのでバッグの中からブルーマーメイドの証明書と保安隊の証明書を取り出して見せる。

物凄く驚いた顔をしてすみませんと謝つてきた。分かつてくれたようで何よりである。

「あの今ミケちゃん話が出来そうにないので私でもいいですか?」

「構いませんよ。取り敢えずどういうことがあつたのか知りたいので」

「私達今日買い物に来てたんです。そしたらきなりある人たちが絡んできて、周りの

人も見てるだけで何もしてくれないし」

「まあ確かに相手がナイフ持つてたら迂闊に手を出せないからねえ。問題はそつちの子、ミケちやんだつけ？なんでブルーマーメイドの正式採用銃持つてんの。銃刀法違反だよ？」

「あ、あのこれ。も、持つてるんですけど」

そう言つて彼女は名刺サイズのカードを取り出した。

特別小火器所持仮免許第1408号 期限2016.4.1

氏名 岬 明乃 申請済み火器

年齢 15 ワルサーPPK

住所 長野県松本市

所謂これは銃器の所持免許なのだがかなり審査が厳しかったはずだしこんな少女に取れるとは思えないが登録番号を調べると本物だった。

「ありがとう、なら大丈夫だ。ただ少し見せてもらつていい？これ確実に整備してないでしょ？」

「えっ！ちゃんと磨いたりしますよ」

「こいつの中のことだよ。見てみたけどボロボロになつてゐる。もう一発撃つてたら多分壊れたよこれ」

「その、整備の仕方しらなくて。これ親の遺品ですし」

「ああ、はい。じゃあ取り敢えずそちら辺のファミレスでも入つていい? 何か奢るから。もう少し話を詳しく聞きたいし」

「すみません。ミケちゃん行こう」

店内

「取り敢えず社会不適合者の皆さんには逮捕したから大丈夫なんだけど岬さん発砲しちゃつたでしょ。あれかなり不味いんだよ」

「どうしてですか? 正当防衛ですよ!」

「なんでヤバいってあの免許。所持は許しているけど発砲は許可してないし君が撃つた

弾、心臓直撃してたよ」

「それって、死んだつてことですか」

「簡単に言えばそういう事。まあ遅かれ早かれ彼等は死んでたと思うけどね。ありや末期の薬物中毒者だよ」

「まあそんな訳でどうするの? 1回目だし正当防衛。多分厳重注意で済むとは思うけど。どちらにせよしつかりと銃は整備しろよ」

「あの、私達ブルーマーメイドになりたいんですけど今回の件でなれなくなつたりて?」

「あー、絶対にない。安心しろ。だいたいブルーマーメイド自体戦場まがいの所に放り込まれるんだから彼等としても殺人経験のある人間はほしがる」

「ありがとうございます。なんか書く書類とかつてあります?」

「まあ被害届けと発砲に関しての始末書位でしょ。近い内に封筒かなんか届くから大丈夫だよ。じゃあそろそろ行くからこれで払つといで」

万札をおいてとつと立ち去る。この時気付いていなかつた。真霜さんから聞いた話は一般で知られていないという事が。

しばらくして

「ねえ、ミケちゃん? 大丈夫なの?」

「ごめんね心配かけて。でもさモ力ちゃんあの人も言つてたけどブルーマーメイドってそんなにひどいのかな?」

「お母さんが教えてくれた限りだと確かに死傷者が出るつて聞いたことがあるけどそんなに戦場だなんて。冗談だよきつと」

「だよねえー。じゃつ帰ろつか」

「うん」

二人の少女は今の日本を表すような夕日に溶けていった。

## 試験と演説

今日は試験を行うことにした。私がこの世界に来てからもう半年はたつただろうか  
寒かつた冬も終わりもう夏だ。

「全員今日は座学無しだ」

教室中が歎声に包まれるが恐らくこのあと座学の方がマシだつたと後悔するだろう。  
さて何人が耐えれるだろうか。殺人の重責に、あの発砲の重さに。

バスに乗つてしばらく行くと地下に入り停車した。その後ゆっくりと歩いていき思  
い鉄の扉を開けると目の前に帝国陸軍正式採用銃である12式自動小銃と着剣済みの  
11式銃剣。そして14式自動拳銃との弾薬が人数分用意されていた。

「全員銃をとれ。安全装置を確かめろ！」

「全員装備完了です」

「宜しい、ではあの暗幕の向こうへ向けて12人づつそれぞれ3点バーストで発砲、弾が  
無くなつたら補充しろ。こちらが終了と言ふまで発泡し続ける。始め！」

軽い発砲音が連續して続きしばらくしてからザワザワし始めた。見ると大量の縛ら  
れた人間がある者は呻きある者は体中穴だらけなつて倒れてたり無傷の者は睨んでき

たり中々スプラッターな光景だ。

「いつ私が発砲止めと言つた、撃ち続けろ」

驚いたことに数秒後には発砲が再開されていた。どうやら思つていた以上に私の教え子は優秀だつたようだ。

「撃ち方止め。諸君おめでとう！試験合格だ。これより君たちは本当の海上保安隊の一員だ。

さて君たちに一つ言葉を贈ろう。

同じ軍人でも我々はブルーマーメイドのような「偽りの盾」じゃない大日本帝国の盾であり矛盾なんだよ、私が薄汚い人殺しなら、あなたは鎖に繋がれ、意思と自由を奪われながら、そのことに気づきもしない哀れな人魚だ。あの条約後に育つた者が語りそうな理屈だ。主権と国民を守るためにではなく欧米列強の利権保護の手駒としてある。あなたたちブルーマーメイドとはいつたいなんだ？まやかしの存在理由しか持てないまま他国に尻尾を振る軍事力。そのことに気づきながらも困難を恐れ異議申し立てもない。そんな存在が負け犬以外の何かだといえるのか？これは海軍が解体される時ブルーマーメイドに対して会談に望んだ海軍上層部の一人が言つたことだ。それからこんな話をしたな、とある海洋学校生徒が海賊に襲われたとき許可が降りず積んであつた小火器類を使えず乗員は全滅、船は奪われた。そのニュースを見てこういったそ

うだ。銃を持っていても撃てない、いい国だな。と。

だが今日からそれは変わる、我々海上保安隊は日本の主権と国民を守る為にある。貴様らにその覚悟はあるか?」

一人の生徒が言つた

「谷風保安監!長い間、私達は日本国民として自ら判断し行動することを放棄してきました。欧米列強の駒だから、……じゃない。日本人すべてが本当の意味で、選び行動することをしないできたんです。みんななんでだと思う?負けたからだよ。私たちは、あの条約から自由を奪われたままそれを当然のごとく受け入れ生きてきた。責任逃れの言い訳を口にしながらね。私はこの国にをまた四海に囲まれ独立し力に満ちたその島は間違いなく日本だつて。それが世界のジパングだつて証明したい。でもそれは私が日本だからって訳じやない。選択し行動する自由は敗者にはない。勝者だけが行使できる権利だとようやくわかつたからだよ。みんなはどう思う?」

色んなところからそのとおりだという声が上がる。ここで私もここで一言言つた。

「欧米列強の駒ではない。日本人だから変えるのだ。歴史を創るのは欧米列強じやない。我々だ!」

外に出て全員で帽子を投げる。万歳三唱が自然と起きた。まだ興奮したように話しあっている教え子たちを尻目に煙草を吸いながら脇の方にいる影に行つた。

「私の事捕まえます？特高さん？」

「バレてましたか。谷風さん。いやいや、そんな事する気はサラサラありません。あなたの演説大変感服しました。我が特別高等警察は貴方の味方ですよ。ではごきげんよう」

また影のようにきえていった。

各長決定

艦長 谷風色葉

副長／船務長 田阪 訓子

砲雷科

砲雷長 錦織 かすみ

砲術長 釜田 千華

水雷長 堂園 沙耶香

航海科

航海長 下澤 真樹子

機関科

機関長 馬橋 貴子

応急長

牟禮 沙世

|     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 補給科 | 衛生科 | 衛生長 | 飛行科 | 整備長 |
| 荒船  | 東原  | 仁禮  | 千勢  | 伶菜  |
|     | 紗耶加 |     |     |     |

## 宴会

「さて君たち、今日は身分証明書を渡す。それを持つてはいる限り君たちは公然と武器を持ち歩き逮捕権を有する。更に国際法規の交戦条件を守つてはいる限り敵の殺傷権限も与えられる事になる。覚悟しておけ、これを受け取つた瞬間から君たちは敵から殺される可能性もある。では順番に取りに来い」

「全員受け取つたな。では宣誓をしてもらおう。田阪 訓子主席保安訓練生前へ」  
「私達は今日より我が國及び国民を守る為に全力を尽くし職務を全うする事をここに誓います。田阪 訓子以下保安訓練生一同」

「おめでとう。君たちは今日から仲間だ。職務以外では口調を崩しても構わん。ただし仕事はしつかりな。じゃあみんなでお祝いしようか。私の奢りで！着替え終わつたやつからホテルニューヨコスカに行つて今日渡した証明書見せてね。案内してくれるからさ」

さつきまでの緊張が嘘のように緩みそれぞれ着替えに部屋に戻つていった。

「あの谷風保安監」

「どうしたの田阪ちゃん？今は谷風さんとか色葉ちゃんとかでいいんだよ。あとは先輩とか？」

「なんと言ふか谷風保安か　じやなくて谷風さんいっつも私達に色々教えてくれてさら  
に厳しいときもあつたけど基本的に優しくて。私嬉しかったんです。あの地獄から出  
してくれて、私がよる悪夢を見てうなされた時そつと大丈夫だつて言つてくれて、谷風  
さんは私にとつて親みたいな存在なんです。でも何でこんなに優しくしてくれるのか  
分からなくて。教えてくください！お願いします」

「うーん、じゃあ少し話をしてあげよう。ある所に一人の人間がいました。彼は軍人で  
したが日々の戦闘で疲れていて家に帰つても倒れ込んで眠るような日々：眠つてる間  
も悪夢にうなされる、そんな時上司でもあつたとある女性がそつと撫でてあやすように  
言つた大丈夫、大丈夫なのよ。貴方は何も悪くない、私が命令を出してるんだから貴方  
は何も悪くない。あなた達は私の子供のようなもの、子の責任は親が持つ。だから大丈  
夫。あなた達は家族よ。だから貴女も上に立つようになつたら責任を持つのよつて」

「それは谷風さんの体験談ですか？」

「サアどうかな？早く着替えて来て。バイクで行こう」

「はい！お母さん！」

思わずドキリとした。子を持つとはこんな感じなのだろうか。一応元男だが。

「まあいい、この子達は私の大切な部下であり子だ」

「谷風さん何か言いました？」

「いいや何も、さあ早く着替えてきたまえ。宴会に乗り遅れるよ」  
ハツとした用に彼女はかけていった。

電話がかかってきた為出ると真霜さんからだつた。

『どうしたんですか？』

『とある筋からさ今日宴会あるって聞いたんだけど行つていい？』

『全く誰が言つたんですかね、良いですよ保安隊メンバーだけじゃ席多いくらいたでしたし。真白ちゃんや真雪さんに真冬さんも来てもらつて結構です』

『ありがとー！じゃあ早速準備していくね』

『はあ、お待ちしてます』

この後日が昇るまでどんちゃん騒ぎだつたのは言うまでもないだろう。朝真白ちゃんが頭痛いと言いながら頭を抱えていた。保安隊メンバーはピンピンしており酒に強いようだつた。ちなみにだが海上保安隊の艦隊は2つしかない。保安艦隊群の下に2つの保安艦隊がある形だ。

第一保安艦隊はずいからくが一隻にとね型巡洋艦改2隻、あきつき型アイアース搭載駆

逐艦4隻、伊451改3隻、ねむろ型戦闘補給艦2隻

第2保安艦隊はとね型巡洋艦改2隻にあきつき型アイアース搭載駆逐艦が3隻だ。

アイアースシステムと言うのはいかにもつんである日本版イージスシステムのこと。追尾可能な目標は200以上同時迎撃が可能なのは最大で20程で命中率98%という高い精度を誇る。対水上、対潜、対空全てに対応できハルマゲドンモードとも言われる完全自律迎撃モードにした場合接近する脅威とその発射母体を即座に破壊する。技術提供よつて作られた誘導弾、アイアースシステム等を全艦搭載している。

とまあこんな感じだろうか。

「色葉く、お姉ちゃんとイケないことしよ」

真霜さんが酔つて赤い顔で寄つてくる。

「うわっ、酒臭っ！もう酔つ払つてないで早く帰りますよ！」

そんな訳で大騒ぎの宴会だった。遂に明日はいかくに乗艦だ。思いのほか改装がうまくいったそうだ。

# すいかく出港

任命式と軍艦旗掲揚が行われ遂にすいかくに乗り込んだ。半年ぶりだ。

「副長、各部状況知らせ」

「了解、『各部状況知らせ』」

『機関科、原子炉内圧力安定、温度ともに正常。蒸気タービン、補助エンジン、スラスターすべて異状なし、ダメージコントロールシステムチェック完了、全安全装置異状なし。出港準備完了』

『砲雷科、第一砲塔から第十砲塔まで異状なし。各誘導弾異状なし、機関砲異状なし。出港準備完了』

『航空科、飛行船異状なし。搭載武装異状なし。出港準備完了』

『船務科、アイアースシステム異状なし、リンク21異状なし、多目的レーダー異状なし、通信は良好、航空管制システム異状なし。出港準備完了』

『航海科、操舵システムに異状なし、航路選定済み、周囲危険なし、本日の天気絶好の航海日和なり。出港準備完了』

『補給科、食料積み込み済み、調理器具異状なし、いつでも作れます。出港準備完了!』

『衛生科、医療器具に異状なし、AEDも異常なし。出港準備完了』

「艦長、出港準備完了。いつでもいけます」

「今回は私自ら言おう。無線を』

『諸君、艦隊司令の谷風だ。これから君たちとは苦楽を共にすることになる。どうか君達には誇りを持つて任務に当たることを期待する。これを持つて訓示とする』出港用意』

『出港よーい、出港ラッパ鳴らせ』

出港ラッパが大きく響き日本最大の船体が動き出した。多くの人が保安隊の出港を見まもる中汽笛を鳴らし出港したのだ。

「帽フレーー」

真っ白な帽子をふつて行く。

「艦長日程は確かに外洋で訓練を行つて救難信号や応援要請の際は駆けつける形でいいんですか？」

「ただし何があるかは分からん。もちろん不審船がいたら警告し警告に従わないわない場合は艦砲射撃で沈めて構わん』

「了解』

当直のみがいる艦橋でゆつくりと紅茶を飲んでいると  
『艦長、応援要請です！場所はオーシャンモール四国沖店より東方10マイル、無線ぎり  
ぎり繋がります。繋ぎますか？』

『つないでくれ』

『こちら海上保安隊。そちらの所属と状況を報告せよ』

『こちら呉海洋学校所属、航洋艦不知火。海賊と思われる武装集団に攻撃を受け現在追  
撃を躲しつつ街から引き離していますが恐らくそんなに持ちません、うつ！現在被弾状  
況は敵の対戦車ロケットランチャー等を被弾、機関砲で応戦するも数が多く主砲は弾数  
がありません。現状負傷者12名戦死者2名至急救援を！』

『こちらも救援に向かうが周囲のブルーマーメイドやホワイトドルفينにも連絡した  
か？』

『連絡しましたが一番近くで対応できる戦力を持つ艦隊は海上保安隊だけだと』  
『分かった、敵の武装は？』

『中型の漁船に見せた軍艦です。武装こそ表向きに積んでませんが艦橋に機関砲撃ち込  
みましたが弾かれました。あれは！みんな伏せて！』

大きい爆発音の後に無線から声はしなくなつた。

「直ちに対艦誘導弾と誘導爆弾を積んだを持つた飛行船を発艦せろ。重量があるため恐らく通常の垂直離陸はできない、カタパルトを使え」

副長が即時に指示を出し船の速度が上がっていく、横を見ると武装を搭載したハイブリッド飛行船がカタパルトで射出されるという珍妙な光景が広がつていた。この艦隊自体は攻撃範囲までは後6時間、現場到着は12時間後だろうか。

飛行船は射程範囲まで約1時間、現場到着は3時間後。なかなか長い。

「総員戦闘配置につけ！ 対空、対戦、対水上警戒を怠るな。副長、航空隊からは？」

『攻撃隊 I F F に反応は？』

『電波がとぎれとぎれです。レーダーには反応がありますが他のものと比べても大きさは小さくやはりいつ映らなくなつてもおかしくありません』

『最悪船沈められてるな。遺体袋用意するように』

『了解』

それから約3時間が経過し連絡が来た。

「司令、航空隊より入電、読み上げます。不知火の残骸と思われるものを発見。生存者は見当たらず死体多し。回収を開始する。だそうです」

「あと九時間はしないと海域にはつかない。遺体袋を多めに用意。報告書も作るよう

に

「了解しました。それからこんな時に言うことじゃないですけど海上安全委員会からブルーマーメイドフェスタに出るように要請が来てるそうです」

「こんな時に全く、出ると返事しろ」

「了解」

「これは酷いな、あたり一面油と残骸で埋まつてる。肝心の武装勢力はいないし最悪だ。副長は遺体見たか？あれはかなりでかい機関砲をくらつたあとだ。多分艦橋を狙い撃ちしたあと何かしらの方法で沈めたんだろうが」

「見た感じ内部で物を爆発させた感じらしいです」

「取り敢えず到着したブルーマーメイドと協力して残骸の回収をするか」

「それからあちらに乗り切らない遺体を持つて一旦呉に寄港します」

「宜しい、遺族の方にも報告しないとな」

「そうですね、空砲も用意しておきますか？」

「そうだな、こちらで葬儀をすることになる事になるからそこらへんの手続も頼む」

「分かりました」

「入港よーい」

タグボートに押されて港に着岸するともやい綱を投げて船を停泊させる。

「副長以下当直以外の船員下船準備完了しました」

「宜しい、遺体はちゃんと棺に入れたな?」

「はい」

「棺桶を運ぶのは船につんである車を使え、行くぞ」

「下船開始」

港にはたくさんの不知火乗員の親族が立っていた。

# 作戦名：遺憾の意

タラップを降りると通報を聞きつけた不知火クルーの遺族達が集まっていた。

「こんにちは、海上保安隊の谷風です」

「私は不知火艦長の母です。あの娘は?」

不安そうにしながら聞いてきた。

「不知火乗員は民間人への被害を抑えるというブルーマーメイドとしての職務を全うし  
四国沖にて……戦死しました」

目の前で一瞬彼女の母親が硬直したあと氣を失った。倒れる前に抱きかかえ呉海洋  
学校の校医に預けた。

「顔の確認はしますか?」

聞くと何人かの遺族が手を上げたので現在遺体を安置しているところまで案内する。  
一番形の残っているものは体に小銃弾を数発受けており腕吹き飛んでいる遺体もあり  
妹と思われる小さい子には立ち入りはご遠慮頂いた。

葬儀は盛大に執り行われ武装勢力の掃討作戦が実施されることになった。そして初  
の海上保安隊に対して海上保安行動が発令された。文面で言うと有事の際日本国及び

日本国民を守るため必要最小限の武力行使を行うこととされているが実際は海上保安隊が全戦力を持つて日本への害意を叩き潰すことを意味する。

武装勢力の潜伏場所は太平洋上にある廃棄されたフロート、作戦名は遺憾の意。以降日本が遺憾の意を発表するとその国が焦土と化すというデマが流れたのはまた別の話。

### 太平洋上

「艦長、あと十分で敵艦射程範囲に入ります」

「宜しい各艦に通達、対水上戦闘用意」

『対水上戦闘用意!』

「全艦戦闘準備完了、敵射程範囲に入りました」

「対艦誘導弾攻撃始め」

『対艦誘導弾攻撃始め』

「艦橋から見ても分かるが次々に対艦ミサイルが発射されていく。

『第一射8発全弾命中。敵残存艦艇3』

「艦長どうします?これ以降は主砲での対処を具申しますが」

「宜しい、以降は主砲で対処せよ。フロートに対しては対地誘導弾を使用」

「了解、対地誘導弾攻撃始め」

護衛の駆逐艦3隻から一発づつ飛んでいく。「一発で大型のコンクリート製建築物を吹き飛ばすだけの威力がある対地ミサイルが3発だ。海賊のオンボロフロートなんて一瞬で海の藻屑だろうな。ザマア見ろ」

「艦長なにか言いました?」

「いや何も言つていなかが?」

「そうですか、主砲射程圏内です」

「主砲撃ち方はじめ」

『C I C 指示の目標、主砲撃ちーかたー始め』

夜の闇に連続して火の花が咲く。艦橋の誰かがキレイと呟いた。たしかにそれは幻想的ですらあつた。しかしいま戦闘中、やつているのは殺人行為である。しかし誰一人としてそれを気にする者はいない。そうなる様に教育したのは自分だが彼女達はもう普通の女子高生に離れないだろう。その後対地ミサイルの命中も確認され西日本を荒らしていた海賊は全滅。映像は一部が公開された。その後野党からはやりすぎ等の意見も出たが帰還した際は大歓声で迎えられ予算も増額された。

そして横須賀のとあるクラブ

「どうだった 初めての実戦は? 副長」

「なんというか普段からの訓練と特殊教材のおかげでこれと言つて問題なくできた気がします」

「それは良かった。じゃあまた訓練かな。暫くは戦闘もないだろうし」

「あつ、そういうえば艦長、気になることがあるんですけどいいですか？」

「良いよ、何？」

「航空科の子たちが言つてたんですけど飛行船格納庫を出ようとした時に格納庫の横の扉が空いてて中に見たことないものがあるって」

「それで？」

「何なんですか？私も見ましたよ。スキッパーのようにも思いましたけど違う。更にそこには飛行船に積んで使う筈の装備が置いてある」

「ここから私が言う事は独り言だ。その上で聞きたいなら聞くといい

飛行機だ、音速で空を飛ぶ物、ずいかくの本当の運用の仕方はその航空機を使用して海上の基地として動くこと。都市をまるごと吹き飛ばす爆弾だって積める」

副長は言われたことがわからないようですボウつとしていた。仕方ない、宗谷家の面々にもへりに載せろ言つてたし明日にでも飛ばすことにした。副長に知りたければ前には当たり前の様にレクサスが停まっていた。乗ると発進し宗谷家向けて走り出し

72 作戦名：遺憾の意

た。

## 異界の戦力

『昨夜海上保安隊による初の軍事的行動が行われ公海上にいた海賊通称太平洋解放軍が壊滅しました。今日はこの事について東京帝国大学名誉教授で軍事に精通しておられる平岡教授に来て頂きました。よろしくお願ひします。「はい宜しく」それでは早速質問なんですかけれども今回の件について』

「ライライしてきたのでテレビの電源を切る。

「はあー、嫌になる。前線どころか戦争に参加したことすらない連中に文句言われる筋合いはない」

「あら、今日はずいぶんご機嫌斜めね。どうかしたの?」

「ああ、真雪さん。今朝のニュース見ました?人の事大量殺人犯扱いですよ」

「確かにあれは酷いわね」。そう言えばブルーマーメイドフェスタの時警備やつてくれるんでしょ?」

「ええ、こちらとしてもそちらの装備ではお世辞にもテロリストやなんかに対向できませんからね。なんですかゴム弾、聴いたときキレイでしたよ。相手はフルメタル・ジヤケットなのにこちらはゴム弾。あの死傷率の高さも納得です」

「元を正せばただの沿岸警備隊ですからね。しかも国際組織だから軍との戦闘はできな  
い。そんなのに国防を任せてるなんて私ですら信じられないわよ」

「そう言わないで下さい。そのための海上保安隊ですから」

「ふふ、そうね。そういえば今日お墓参りに行くんだけど来る？」

「誰のですか？私は親族ではないですし」

「彼女は私の同僚よ。戦闘で子供を残して死んでしまったけれど。とてもなく強かつ  
たわ。本当に強かつた。知名さんは。」

「それは、すごいですね。今は靖国神社に？」

「いいえ、太平洋の中にいるわ」

「それは散骨したことですか？」

「違うわ、遺体が見つからなかつた」

「それはつ、いえ何でもないです。英靈の墓前に連れて行つて下さい。これから国防  
の担い手としても御報告したいですから」

その後レクサスで岬にあるお墓の前に行つて仏花をいけ線香をあげる。墓を掃除し  
最後に敬礼した時だつた。

「あらもえかちゃんじゃない。今日はお墓参り？」

「はい、いつもありがとうございます。真雪さん。こんな立派なお墓立てていただいた

上に掃除まで

「気にしなくていいのよ。年取ったおばさんのお節介だから」

「んつ、貴女は確かあの岬明乃とか言う子の近くにいた知名さんかな？」

「あつ、今日の朝ニュースに出てた」

「海上保安隊の谷風です」

「あの時はありがとうございます」

「いえいえ、書類書くのでおわったでしょ？」

「ミケちゃん曰くそうだつたらしいです」

「それは良かつた。そういえばブルーマーメイドになるのが夢なんだっけ？」

「はい、ミケちゃんとも約束したんです」

「そうか、試験頑張つてね。ブルーマーメイドフエスタには来るの？」

「いえ、抽選外れちゃつて」

「そうかあ。岬さんもかな？ 行けるんだつたら行きたい？」

「はい」

「少し待つてて」

『どうも谷風です』

『ああ、君はどうしたんだい？ そちらから掛けてくるなんて珍しい』

『ブルーマーメイドフェスタのチケット2枚くらい確保できますか?』

『いいぞその位だつたらいつでも言つてくれ。因みに我々は君達がやつた事を高く評価しているよ。これからも期待しているよ』

『それはそれは。ご期待に添えるように頑張りますよ。それでは次の会議で委員長』  
『うむ、谷風保安監。近いうちに太平洋が荒れる可能性がある。注意しといてほしい』  
相変わらずの人だ。海上安全委員会をまとめていく為にはあれくらいの方がいいのだろうか。

後ろを向いてニッと笑いながら

「チケット2枚確保!」

「本当ですか!」

「嘘行つても仕方ないだろ。来週くらいには届くと思うから」

「ありがとうございます!」

「どういたしまして。真雪さん、この後どうします?」

「もえかちゃんはお昼食べた?」

「いえまだですけど」

「なら丁度いいわ。どつか食べに行きましょウ」

「いえ悪いですよ。そんな」

「気にしなくていいのよ。谷風ちゃんも行くでしょ？」

「私は一応1組織の幹部なんですが。まあ私用だからいいですけど。そうですね。ご馳走になります」

「彼女もそう言つてるんだから来なさいよ。たまには良いじゃない」

「そういう事なら。真雪さん、ご馳走になります」

「じゃあ車乗つて。親御さんには連絡しといてね」

「はい」

その後知名さんの意見もあつてハヤシライスを食べに行く事になつた。結論、美味し  
かつた。

帰りの車の中で

「ファー。眠い」

「知名さん、寝たければ寝て大丈夫だと思いますよ。家までお送りしますし」

「いえ、駅で下ろしてくれれば」

「最近物騒だから送つてたほうが良いと思うんですけどね。どう思います真雪さん」

「そうね送つていくわ。取り敢えず寝てなさい」

「ならお言葉に甘えて」

そうつぶやいて彼女はすぐ寝息をたてていた。

「寝ましたか。この子達には平和な明るい海のブルーマーメイドとして働いて欲しいですね」

「そうね。血と油で染まつた暗い海を見るのは私だけで十分だわ」「何言つてるんですか。私ではなくて私達ですよ。海上保安隊は暗い海にならない様に常に暗い海に向き合わなくてはなりませんから」

「そうね、これからも宜しく。谷風保安監」

「こちらこそ宗谷校長」

一人の無垢な少女と一人の血にまみれた人魚、そして一人の軍人をのせレクサスは今日も走る。

日本近海無人島から5マイル地点

「真霜さん、真雪さん、真冬さん。副長。ヘルメットはつけました?」

「「「装着完了です」」」

「わかりました。では行きますよ」

エンジンのスイッチを入れローターが回転を始める。スロットルをゆっくりと上げていき異界の空に飛び立つた。

「どうです、ヘリコプターの感想は?」

「すごいとしか言えないわ」

「艦長、これは。世界のパワーバランスを崩しかね無いですよ」「この速さに機動力。更に武装まで積んでるなんて」

「確かにこれは扱いに慎重になるわね」

動いている標的艦に向かつて魚雷を投下し島の上にある廃棄されたトーチカに誘導弾をぶち込む。最後に横についている機銃を遠隔操作で発射する。

ゆっくりとみくらのヘリコプター様に強化されたヘリ甲板に降りる。「これを使えるようになればきっと今までとは比べ物にならないくらい効率が上がるでしようね」

「あと明日は戦闘機を飛ばします。きっと驚きますよ」

その鉄鷲は成田飛行船発着所の格納庫で今か今かと爪を研いでいた。

# 銀翼

『こちら海上保安隊第一航空団第一戦闘機隊所属ワイバーン01から管制塔へ。離陸許可申請』

『こちら成田管制塔。ワイバーン01へ離陸許可。第一滑走路を使用せよ。良いフライトを』

『Thank youControl Tower』

異界の鉄鷲が羽ばたこうとしている。

「こいつ乗るのも久しぶりだな。火器管制、操縦系統、オールシステムグリーンてか」

久しぶりの操縦桿を握りエンジンを点火する。

三菱の誇る最新鋭エンジンが轟音とともに動き出した。スロットルを上げ遂に

鉄鷲は飛び立つた。

真雪Side

「本当に飛ぶのか不安だつたけれど。これは恐ろしいわね」

娘の真霜の言葉が聞こえる。確かにあんなものが世に出回れば彼女？彼？の言つていた通り戦争も激化するだろう。カタログスペックだけでもオーバーなのに現物はそ

れ以上だ。

演習と称して廃棄予定の艦に攻撃しているただの的でゲームになつていて。極めつけは陸軍の演習場での燃料氣化爆弾と言う物の投下だった。あんなのを投下されたら地上にいる歩兵は一瞬で丸焼けだろう。更に恐ろしいのはあれより強いものがあるらしいがそれを知つているのは私を含めた一部の上層部のみ。

「あの時助けといて正解だったわ」

宗谷真雪の思考は続く。

真雪Side end

「うーん、やつぱり空はたまない。艦長やつてるけどやつぱり私は戦闘機乗りなんだねえ」

アフターバーニングをし加速する。このかかるGがまたまらなく気持ちいい。

しばらく飛んでから着陸しグーツと体を伸ばした。

「すごいわね、これがあればすぐ現場に急行出来る」

「まあそれはそうですね。でもこれを扱うには訓練が必須です。うちの子達には基礎は叩き込んであるのであと半年訓練すれば運転できるようになりますけど」

「谷風君、これを運用するのが本来ずいかくなのかね？」

「はい、今回飛ばしたのは戦闘機ですがこれ以外にも対地、対艦を行う攻撃機。電子戦を行う電子戦機。輸送を行う輸送機。警戒を行う早期警戒機。対潜任務を行う哨戒ヘリなどの回転翼機。無人戦闘攻撃機や偵察機なども運用できます」

「ならば直ちに本来の運用方法に戻すようにしてほしい。君達は一年後に開催される主要7カ国合同軍事演習に参加することになった。今までではブルーマーメイドしかいないうからと言う理由で参加しなくても良かつたが保安隊は出なければならない。他にもドイツから招待状まで来ている」

「了解しました。因みに三菱に渡したあの設計図の機体完成しそうですか?」

「スカイレーダーと烈風だつたかな。完成したそうだ。さらに言うと飛行試験もクリア。確か海上保安学校の所属となる予定の航空練習艦雲龍も半分の工程が終わつたそうだ」

「そうですか。ありがとうございます。あんなたくさんのお算つけていただいて」

「気にしなくて良い。あと数年で名実ともに君達は日本海軍になる」

「それは急ぎ過ぎでは?」

「仕方が無いのだ。こちらにも事情はある」

「わかりました」

海にゆつくりと夕日が沈み始めていた。

同時刻西ノ島新島沖　日本海洋開発研究機構所属海洋調査船たいげい

「艦長、ますいです。火山活動発生。巻き込まれます！」

「全速前進、急げ！」

「ダメです。いくらやつてもエンジンがかかりません」

バチツ！

艦内の電源が落ち配電盤やモニターから火花が上がり無事なタブレットからはエンジンルームの火災や噴火の兆候など警報が立て続けに表示される。

ズウウウン

「現状を報告しろ」

「ひ、非常電源復旧！エンジン使用不能！艦内的一部で火災発生。海底火山噴火によりスクリューを含めた本艦の移動能力を喪失。地上の噴火によりレーダー故障！電子機器にも重大なダメージ。非常システム故障！船体下部に複数の亀裂！浸水発生中！持つて十分です」

「総員退艦急げ」

「了解」

その時だつた海底火山が再度噴火。船は運悪く衝撃波が直撃。亀裂が広がり真つ二つに折れ轟沈した。とある生物兵器の資料、実物を積んだままの状態で。

# ブルーマーメイドフェスタ

ブルーマーメイドフェスタの行われる横須賀女子海洋学校の門の前でチケットと手荷物のチェックを行いながら何と他国のスパイが多い事かと驚いていた。

どう考へても可笑しい思わないだろうか。金属探知機に引っかかったので連れて行つて検査したら英語で怒鳴り始め出てきたのはベレッタの実銃。確信犯すぎる。ちなみに捕まつたやつは次の日には釈放、手荷物は何も取り上げられなかつたらしく。こんなだから舐められるのだ。前回は自称海賊に逃げられたばかりなのに。

持つてる武器も服も手入れが行き届き同じ装備の武装集団を海賊と言うかはその人次第だが。

因みに噴式推進魚雷。略して墳進魚雷はアメリカの発明品だ。誘導性能はなし。ある程度は誘導できるが水の中に入るとあとはただの魚雷だ。しかも高い。現状の日本の様に国際組織に国防を頼つてているような所ではバカスカ打てるものではない。因みにどんなに豊かな国でも軍事力が無ければ鴨ネギどころか最初から鴨鍋状態だ。

「谷風さん！久しぶりです」

「知名さんですか。お久しぶりです。明乃さんも。お元気でしたか？」

「チケットありがとうございます」

「気になくて大丈夫ですよ。

ではセキュリティ検査をしますので金属製品

と手荷物をこちらへ。銃器類は預り証を発行するのですからこちらへ

その後明乃さんには預り証を渡し二人は仲良く中に入つていつた。

「谷風君、元気かね？」

「委員長！お体は大丈夫なんですか！」

「どいつもこいつも私を老人扱いしあつて。身体のどこも悪くないわい」

「ならないですけど。なぜこちらへ？」

「何、宗谷君に会いに来たのだよ」

「そうでしたか、屋木1等保安こちらの方を本部テントまでお連れしろ

「了解しました！こちらへどうぞ」

門の前で暇を持て余しているとコートを羽織った初老の男性が近づいてきて制服のポケットに紙を入れていった。開いてみると至急市ヶ谷に来いということだった。近くにいた部下に支持を出し副長に無線で指揮権を委譲してから急いで停めておいたフェアレディZに飛び乗り速度制限ギリギリでとばす。海上安全委員会の本部がある旧大本営の駐車場にそのままツッコミギリギリで車を止め会議室に入った。

「随分なご登場の仕方だな谷風君」

「いきなり呼び出したのはそちらでは？」

「フン、これを見ろ」

手渡されのはとある男のプロフィールだつた。確かにとあるベンチャー企業の社長で最近急成長していたはず。他にあつたのはその社長が乗るプライベート飛行船の飛行ルートと積荷の裁縫だつた。すべて医薬品とかいうふざけた物だつたが。

「麻薬ですか」

「その通りだ、やつは政府にも口が聞くようでね税関くらいなら朝飯前なんだろう」

「お望みはレア？ ウエルダン？」

「しつかりと焼き上げてくれたまえ」

「お望みどおり食べごろになるまでしつかり焼き上げておきます」

「コチラから以上だ。ではまた」

「ええ、せいぜい身辺にお気を付けて」

「君もな」

急いでフェアデイ乙に戻り人気のない港の埠頭から海に突っ込む。ちなみにこの車は水陸両用に改造してある。こらそこボ〇ドカーミたいとか言わない。

しばらく海上を走つたあと後ろから20式個対空誘導弾を構える。腕時計を見ると

ここを通過するのは約30秒後、スコープを覗き込むと既に飛行船のエンジン部分にロックオンされていた。

「良い夢を、実業家さん」

引き金を引くと飛行船目掛けて飛んでいき命中した。途中で爆発し船体がバラバラになると燃えなかつた荷物が落ちてきたり怪我をしたが生き残つた人間がいたりしたが荷物には爆弾を仕掛け人には口に爆弾を咥えさせて起爆したため跡形もないしブラックボックスについてはもう偽物に最初からすり替えてあるため問題ない。

「バレないうちに退散しますかね」

ぼそっと独り言を言いつつ車のエンジンを掛けなおし走つて行くと前方に格納庫の開いた潜水艦が浮上していた。そのまま中に入りエンジンを切る。

「お疲れ様です。艦長」

「副長！君も仕事？」

「ええ、今さつきとある政治家の事故現場をミテしまいました」

「そうか、この船はこのまま横須賀に？」

「いえ一度徳山によるそうです」

「そこでおろしてもらつて陸路で帰るか」

「えつ！運転してくれるんですか？」

「もちろん、とばすぞ」

「じゃあ徳山ついたらなんか車内で食べられるもの買っておきますね」

「ありがとう」

「どういたしまして」

その日音もなく暗闇の水中をゆっくりと進んでいく潜水艦があつた。

## 硫黄島要塞

「まもなく硫黄島要塞に到着です」

「我々の新しい家か」

「横須賀が手狭になつたからつてこんな島に本部ごと移すことになるとは思いませんで  
した」

「横須賀なんかよりよっぽど頑丈だけどね。」

島一つまるごと使つて作られた大型基地兼要塞

ずいからくをも収容可能な大型屋内ドックに島中に張り巡らされた地下道。居住性抜群の部屋に優れた指揮通信設備。自己完結の可能なシステム。島の各所に設置されたトーチカ、砲台

まさに難攻不落だよ。国軍時代のお土産だね」

「アメリカとやり合つても補給さえあれば食い止められるのがコンセプトですもんね」

「46センチ砲や80センチ砲を要塞砲にするのは少し頭おかしいと思うけど。他にも  
我々独自の改造でレーダー強化や誘導弾、弾道弾なんかも配備。発進は難しいけど破壊  
されることはまず無い屋内滑走路。盛り込み過ぎとかいうレベルだよ」

「少々硫黄臭いですがこれから私達海上保安隊の主要基地兼本部ですもんね」「まあ口マンあつていいんじやん」

「ですね」

副長とくだらない事を話している内にずいかくは屋内ドックへと続くトンネルを行っていた。

「それにしても凄いですね」

トンネルは全面コンクリートで固めてありかなり強い光を放つライトが横と上に取り付けられている。

前方に出口が見えてきた。

「これは凄い」

まわりからも息を呑む音がした。

多くのライトに照らされた大型ドックにこれでもかと言わんばかりの小型ドック。クレーンや運搬車。

「下手な港より設備が整つてますね」

「これは横須賀並みでしょ」

入港した後下船口行くとピツタリ合うようにエレベーターの入り口があつた。  
「硫黄島要塞整備隊全員揃いました。谷風中将閣下に敬礼！」

こちらも返礼し疑問に思つたことを尋ねる。

「私は保安監であつて中将ではないぞ」

「海軍、陸軍に当てはめたら中将閣下です。それに我々は元軍属です。こちらの方が呼び慣れていて」

「ならそれで構わない。これからもよろしく頼む」

「了解」

他にも何箇所か挨拶まわりをしたりしたあとで要塞の司令室に来た。レーダースコープ、大型ディスプレイにたくさんのコンソール、何箇所か新しい物があるのはこちらで改造したからだろう。たくさんの空気清浄装置やエアコン等のおかげで硫黄の匂いや暑さはほとんどなかつた。

「ものすごく快適だな」

「ええ、拍子抜けです」

「せつかく本土に家買つたんだけどこれじやあ帰らなくていいじゃん」

「備蓄もたっぷりありますしね。ご飯美味しいらしいですよ」

「そうか、3000万くらいしたのに」

「休みのときとかに行けばいいじゃないですか」

「こつちのほうが快適」

「本末転倒ですね」

こうしてダラダラした私の基地勤務は続く

はずだった。

「第1、第2砲台次弾装填完了。第3第4は装填中第5第6発砲中！」

「早く攻撃隊を出せ！このままじゃジリ貧だ！」

「第一波攻撃隊出撃しました。第二波攻撃隊は出撃準備完了まで推定15分

「第2滑走路入り口付近に着弾！出撃に支障なし」

「救援要請受諾されました！到着は……」

到着は

11時間後

「砲弾や銃弾は今のところ足りていますしこのまま戦闘を行つてもあと半年は持ちます。しかし有事を想定していないため食料があと2日しか持ちません。また真水については精製装置破損の影響で備蓄2日分のみです」

「くそっ！仕方ない。この際味方だがやむを得まい。全砲台に威嚇射撃を中止を通達。続いて統制射撃を行ふ」

「了解『各砲台撃ち方やめ。これより統制射撃に移行する』」

『目標横須賀女子海洋学校叛乱艦隊。

てえーーー』

先程のまでのバラバラの砲撃音ではなくお腹に響くような重低音が聞こえた。

「第一射効果報告。撃沈無し、大破なし、武藏の前方の主砲2基破壊。他駆逐艦、巡洋艦においても軽微ながらも損害がある模様」

『こちら第一波攻撃隊。これより雷撃を開始する』

スカイレーダーから投下された魚雷が高速で進み命中。沢山の水柱が上がる。

「敵損害軽微。効果認められず」

「演習用の無弾頭じゃダメか。対艦誘導弾発射準備。電子攻撃に注意せよ」

「対艦誘導弾準備完了。発射」

「目標選定完了、脅威度判定完了。大和型の主砲及び巡洋艦の主砲に対し攻撃する模様」

「到達まで 5 4 3 2 1 命中 大和型の一部戦闘能力喪失を確認」

「放つておけ。それより損害を報告せよ」

「各砲台損害なし、トーチカに一部被害、海岸近くの地下道が崩落してゐる模様です」

「各員復旧作業にかかる」

硫黄島の勝利を祝福するかのように朝日がのぼってきた。

## 異変

「委員長これはどういうことですか？横須賀女子の艦艇が群れをなして襲つてくるなんて」

『現在調査中としか言えない。だがこれだけは伝えておく。海上保安隊に對して期間無期限の無制限警備行動を命ずる』

「1103無制限警備行動確認しました。これより武器の無制限使用を開始します」

『了承した。幸運を』

「そちらこそ。こちらも分かり次第報告します。では」

「なにか分かりましたか？司令？」

「敢えて言うなら今回のこれは闇が深そうだよ。

出港の用意を整えろ。仕事の時間だ

「わかりました。すぐに準備に入ります」

その頃要塞ではないかと思われるくらい巨大な船が駆逐艦と巡洋艦を引き連れ進んでいた。

「艦長ブルーマーメイドの通信を受信しました」

「読み上げて」

「横須賀女子海洋学校所属艦船にて叛乱がおきた模様。委員会、海上保安隊からは調査中の回答のみ。こちらでも調査を実施する」だそうです」

「流石にあのノロマ人魚共にも気づかれたか。それに海上保安隊は既に行動を開始しているかも」

「いかがしますか?」

「恐らく最大の脅威となる海上保安隊第1艦隊と第2艦隊。海上保安学校の航空練習艦隊の3つが今のところ最大のターゲット……だけどこの船じゃあ沈められる。海上保安隊の本拠地、硫黄島要塞も破壊するどころかこっちが痛手を被つた。不味いなあ死か

られちゃうよ」

「は、はあ、まあ確かに後数日もすれば何かしら大規模な行動が出るとは思いますがドンドンドン！ バタン！ 亂暴に扉が開く

「艦長！ 大変です！ 海上保安隊が！」

「どうしたの？ はい吸つてー、吐いてー、吸つてー、吐いてー」

「ふうー。はい報告します。海上保安隊が無期限で無制限警備行動を実施するそうです

「本格的に不味いことになりそう。取り敢えず指揮下に入らなかつた船を沈めることに力を割こう。全艦目標はミッドウェー」

「目的地ミッドウェー諸島。各自移動開始  
ある駆逐艦

すべての乗員からは目の光が消え言葉も発せずに黙々と作業していた。

それこそ全員が同じ人間とでも言うように。

何が起きたのか。

それは後々わかることだろう。

横須賀女子海洋学校所属高圧缶試験駆逐艦晴風

「本当に何があつたんだろう。古庄教官も警告なしの実弾射撃。アドミラル・シユペーの攻撃と救助した船員。わからないことだらけ。本当にどうすれば」

晴風艦橋

「副長何が起きたんですか？」

「横須賀女子海洋学校の艦船に対して撃沈命令が出ている。一層警戒を怠るな。我々には何が起きたのか知らせる必要がある」

「目的地は？」

「航海長針路を硫黄島へ」

「あそこって何もないんじゃないの？」それに危険地帯な沿岸に行くなんて怖いよ  
えてもらつた」

「でも今はお尋ね者だし沈められちやうんじやない？」

「シロちゃん艦長代理ありがとう」

「艦長！シロちゃんはやめてください。副長もしくは宗谷さんと読んでください」

「うん分かつたよシロちゃん。それでさつきの針路変更つて？」

「はあ～～。絶対わかつてないですよね。実は知り合いに海上保安隊の偉い人がいてその人から何かあつたら硫黄島に来るよう言わされてたので針路を」

「艦長！大型艦を含めた計5隻の艦隊が接近中です！電波妨害の影響か正確な位置が捉えられません！」

「そんなこの状況で、総員配置！シロちゃん使える兵装は？」

「現状ですと主砲の50口径12・7cm連装砲3基と

20mm单装機銃4基のみです。報告が正しければ最低でも40センチ砲搭載艦艇と見ていいかと。それにこちらの砲力では未確認船を撃退どころか傷付けることすらできません。早急に現海域を離脱すべきでは？主砲に至っては1基使用不能ですし」

「でも大型船。武藏かも」

「今はそれどころではありません！」

# 動乱 I

「小型艦艇ビーコン強制起動可能圏内」

「やれ」

「管理パワード入力、送信完了。ビーコンシステムの起動確認。船舶情報受信、横須賀女子海洋学校所属駆逐艦晴風です」

「停船命令を無線、モールス両方で伝えろ。停戦しない場合は攻撃を許可する」

「了解」

晴風

「艦長、海上保安隊からの停戦命令です！無線、モールス両方からきています。ビーコンも強制起動させられた模様」

「シロちゃん、海上保安隊は信用できる?」

「少なくとも私の知ってる人であれば、通信士相手の艦の名前は?」

「ずいかくです」

「ということは谷風さんの乗艦か。艦長恐らく大丈夫かと」

「シロちゃんがそんなに言うんだつたら大丈夫だね。八木さんずいかくに打電。  
我テイセンセリ」

「はーい、わかりました」

「ずいかく中央指揮所

「艦長、晴風より打電です。我テイセンセリ」

「よろしい、レーダーどうだ？ ビーコンは止まつてゐるか？」

「はい一箇所から固まつて動きません」

「晴風をロツクだけしておけ。合図あれば撃て」

「火器管制システムオンライン、Y467ロツク」

「よろしい臨検部隊を出せ」

「出発しました」

その後は晴風乗員を確保、事情聴取の後本土へ送つた。晴風は損傷がひどく航行し続けると長期ドツク入りになる事が分かつた為硫黄島内のドツクにて修理をしてから返すことになつた。

アメリカ領ミッドウェー海軍基地前哨監視塔

「おいあれ何だ？」

「日本のブルーマーメイドのYAMATO typeだろう？でも来るなんて聞いてないぞ」

「一応上に問い合わせるか？」

「いや通りかかつただけだろ。貴艦の航海の無事を祈ると送るか」

「そうだな、んつ！？、煙が出てるぞ」

「なんかあつたのか？」

ズウウウウ——ン

「マジかよアイツら撃つてきやがった！」

「そんなわけあるか！今は同盟国だぞ、更に言えば宣戦布告もなしに攻撃を仕掛けてくるなんてありえないだろう！」

「確かに単艦で仕掛けてくるのはおかしいと思うが急げ！本島の奴らに知らせないと！」

この日を持つてブルーマーメイドの信用は地に落ち人魚の脱落は始まつた。

被害は大きくアメリカの Mk 18 航空誘導魚雷を使用するアーレイバーク級レーダー駆逐艦 15 隻が戦闘不能、サウスダコタ級対艦誘導飛行魚雷搭載軽巡洋艦 5 隻が着底や座礁、ニミツツ級戦艦一番艦ニミツツが電源システムの故障で動けず軽い被害を受けアメリカ政府は日本に対し説明と謝罪、部分的な武装解除求め日本はブルーマーメイドを解散という形を取りなくした。

これでブルーマーメイドの船はすべて国の持つ武装船へ成り下がり海上保安隊のみが唯一の法執行機関となる。ホワイトドルフインは船が足りず十分な行動を行えなかつたからである。

なおこのとき晴風は海上保安学校所属艦ということになり赤のラインが消え灰色に塗り直され安全装置が外され近代化改修がほどこされた。  
密かに晴風の乗員も移されていた：

列強各国の軍も動きが活発化しきな臭い匂いが漂い始め海には暗雲は立ちこみ始めた。

ゆつくりとただ確実に世界は戦火の道へと歩みだしていた。

~~~~~

對艦誘導飛行魚雷

を奮つた。

航空誘導魚雷

いわゆるサブロツク。ただし使用するのが長魚雷であるため水上艦も破壊可能。

二ミツツ級原子力戦艦

された。

エンジンは最新鋭の原子炉、使用可能な兵器のバリエーションも多く扱いやすい。最新のレーダーや砲弾迎撃技術を持ち一隻で中くらいの島なら更地にすることが可能